



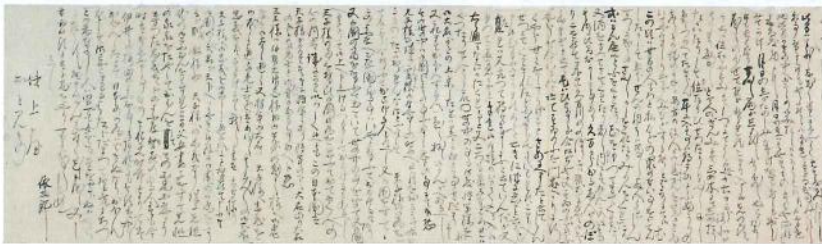
ひとう



海軍隊旗(二曳きの旗)

http://www.ryoma-kinenkan.jp

# 侃 侃 KANKAN GAKUGAKU 諤 諤



元治元年1年21日、自らの生きる真情を述べた姉・奈美、妻・富宛て武市半平太書簡

龍馬のように脱藩し独自の路線を歩んだりする者もいた。土佐勤王党も他藩の尊王攘夷派も、時に武力に訴える行動を起し、幕府や藩に対してテロリズム的な一面がある。彼らの武力行動だけを取り上げれば、確かにそう見える面もあるが、今と同じ社会、同じ常識で考えてはいけない。そこには時代背景が大きく関わるため、それを理解せずに彼らの行動を断じることはできない。

## 土佐勤王党結成

土佐勤王党は、文久元年(1861)8月、武市半平太を筆頭として、江戸で結成された。土佐へ帰国後、同志を募り、下士を中心に200名以上が参加したと考えられている。藩全体が尊王攘夷でまとまる一藩勤王を目指し活動するものの、勤王党内でも一枚岩だったとは言えない。吉村虎太郎のように、天皇の下へはせ参じて即時行動すべき、と考える者がいたり、龍馬のように脱藩し独自の路線を歩んだりする者もいた。



# 土佐勤王党を考える

龍馬・半平太・以蔵の目指した世界とは――

今年(平成27年)は岡田以蔵と武市半平太が処罰された慶応元年(1865)から150年になる。尊王攘夷を目指した土佐勤王党は、結成からわずか4年足らずで党首の半平太が切腹となり、党員で主に影の部分で活躍した以蔵が斬首となった。切腹を言い渡された半平太の罪状文には、不思議なことに、具体的な罪が記されていない。勤王党はどういう国の形を目指し、なぜこれほど早く弾圧されてしまったのか、土佐はなぜ罪を明らかにできないままに処罰に踏み切ったのか、など節目の年に改めて考えてみたい。

## 七年ぶりの展示

### 岡田以蔵の拳銃



岡田以蔵所有の拳銃

本展では、7年ぶりに以蔵の拳銃をお借りして展示する。以蔵といえば、幕末に最も恐れられた剣の達人だった。その以蔵が拳銃を持っていたとは意外な気がする。この拳銃は以蔵の弟・敬吉の息子孫宅に、以蔵の拳銃として伝わっている。拳銃には「LEF F A U C H E U X」(ルフォシユ)と彫られている。

おり、フランス製だと分かる。ルフォシユ社は、老舗の銃メーカーである。以蔵が持っていたと伝わる拳銃と、ほぼ同型の物が1850年代に作られている。

幕末の日本は、薩摩藩や長州藩はイギリス、幕府はフランスと繋がりが深かった。したがって、以蔵がフランス製の拳銃をどこから入手したかを考えると、幕臣の勝海舟あたりからという可能性が最も高そうだが、以蔵は勝の護衛をしたことがあり、実際に暴漢を切り伏せ、勝を助けた。

以蔵は、龍馬よりも早く土佐の砲術家・徳弘董斎に弟子入りしており、砲術の知識があり、そんなところからピストルにも興味があったとも考えられる。その他、半平太が切腹する時、介錯をした義理の甥・小笠原保馬の息子孫宅に伝わった半平太の手紙なども展示する。 三浦 夏樹

飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう!

視聴方法は簡単!

- ① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード
- ② アプリを起動し マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。  
※本コンテンツは2015年9月30日まで閲覧可能です。



# 吉村虎太郎の生家復元に思う

## ～天誅組が繋ぐ東吉野と土佐の絆～



奈良県東吉野村  
阪本 基義

**おめでとう虎太郎!**

土佐脱藩の天誅組志士は17名。文久3年(1863)9月27日、吉村虎太郎は奈良県東吉野村の山中に斃れた。本村では那須信吾(梶原町)、鍋島米之助(森下幾馬(高知市)が戦死、島村省吾(室戸市)が捕縛された。

虎太郎の墓碑は、「贈正四位吉村寅太郎之墓」「吉村寅太郎之墓」「天仲吉村市之神」「吉村寅太郎君原塚」と、村内に4基もある。地元では「吉村さん」と呼ばれて香華が絶えない。

津野町と東吉野村は昭和56年に姉妹村の盟約を結び交流を深めてきた。両町村の行政・顕彰団体などの相互訪問をはじめ、東津野中学校が修学旅行で毎年墓参に来村、昨年から東吉野小学校が津野町を訪問し、中央小学校との交流体験



復元落成した虎太郎生家

学習が始まった。また、隣の梶原町とは昭和51年に友好町村の盟約を結んで相互訪問等を通じて今年「龍馬脱藩マラソン」に東吉野村から選手10人を派遣するという。

6月4日、快晴に恵まれ津野町芳生野で吉村虎太郎生家復元落成式が盛大に挙行された。敷地面積1,533㎡、母屋は茅葺き木造平屋建て、延べ床面積129㎡。東吉野村はこれを記念して東吉野特産の「天然絞り丸太」の床柱を寄贈した。

オープン後は地元「維新の魁・虎太郎社中」が運営を行い、虎太郎関連史料を展示して天誅組や郷土学習の施設として活用されるという。

この落成式に晴れがましく私も招待された。50年前にお世話になった高知大学南浜寮前庭にあった旧制高知高校江部淳夫初代校長の胸像「感激無人生空虚也」と、寮歌・豪気節の一節「南のお国は土佐の国革命と自由の生れし地」を懐かしく思い出した。

これまで、天誅組総裁・吉村虎太郎の知名度は高くはなかった。しかし近年、天誅組ゆかりの地の自治体や顕彰団体の取り組みにより、評価が高くなってきていることは喜ばしいかぎりである。

高知県東部には中岡慎太郎、中央部には武市半平太・坂本龍馬。今回復元された吉村虎太郎の生家は、梶原町の「維新の門」とともに県西部における土佐勤王党・天誅組顕彰の発信基地になるところ。

これで土佐勤王党四天王の揃い踏みである。

# リニューアル構想進む

## 国の重要文化財が展示も可能に 基本設計完成

西隣の駐車場への新館建設と、既存館のリニューアル計画が順調に進んでおり、6月末の時点で、新館・既存館共に基本設計が完成した。今後は実施設計の段階へと移る。

新館は、国の重要文化財も展示できる館を目指しているため、四月下旬には、文化庁や東京文化財研究所を訪れ、基本設計案に対して助言を受けた。

大事な資料を展示する際、当館の一番の障害となるのは、立地条件である。海に近い立地なので、潮風が館内に入りやすく、湿度も上がりやすい。塩は錆びの原因になるため、鉄製の資料は展示が難しい。当館には比較的鉄製の資料は少ないが、文書資料でも塩は粘性が強いため、一旦塩が入るとホコリなどを集めやすく、それが原因で虫やカビの発生を招きやすい。

潮風以外にも、資料の劣化要因は

大きく分けて三つある。光(主に紫外線と赤外線)と酸素(酸化)と水(湿度)である。これらを適正な数値で管理できなければ、資料の劣化を早めることになる。国の重要文化財等を展示するには、文化庁が定めるこれらの基準をクリアする必要がある。

現在進めている新館の設計案は、細かい修正は必要なもの、文化庁でも東京文化財研究所でも十分な評価を頂いた。建築予算と相談が必要だが、このレベルを維持したまま進めることが肝要だ。

既存館のリニューアル案も順調で、小学生低学年や幼稚園児でも楽しく学べる館を目指している。資料展示は全て新館に移る。

見所の一つは地下二階で、「幕末写真館」とする予定だ。幕末維新期の多数の写真を展示することで、幕末の雰囲気を感じられる空間にしたいと考えている。

今の館は、来年12月を以て閉館し、一年間の休館となる。そして、2018年1月に新館・既存館揃っての開館を目指している。

三浦 夏樹

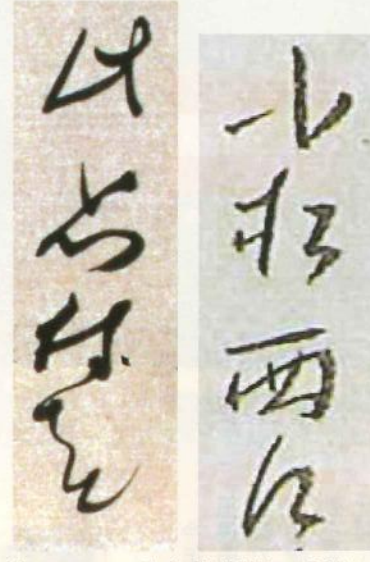
# こもんじょを読むとは

## 文字から知る個性

専門的知識は強力な武器

世に博物館がいろいろあれば、学芸員の専門もさまざま。たとえ「日本史」と限定しても、考古と近現代では要求されるスキルもまるで異なる。専門的知識と技術は、言うまでもなく学芸員の必須道具だが、得意分野を伸ばしていけば強力な武器にもなる。

たとえば当館のような館では、明治維新期の政治史やその研究史のほか、当時の文献(いわゆる「古文書(こもんじょ)」)を解説・解釈する力が求められる。古文書と言ってもいろいろあるが、多くは「くず



「せんたくの手紙」より「此思付を」。「思」「を」はやや癖が強い。

「新婚旅行の手紙」より「小松西郷」。「郷」の字はくずしを知らないと思めない。

し字」で書かれている。古文書を読むというのは、第一義に「くずし字」を学ぶことであり、ついで、その古い文体で書かれた文章の意味を、時代背景や地域の状況なども見渡しつつ、できる限り正確に解釈することである。後者は活字でも訓練できるが、前者はやはり原文に数多く当たって体で覚えるしかない。「くずし字辞典」を頼りに、どこで切れるのかも分からないつなごった字を、最初は一字一字読んでいく。辞書で調べるのを面倒くさがっている人は達しない。「くずし」の形を覚え始めると、次第に単語が分り、見たことのあるフレーズが増え、ミミズの這った跡のような記号が文章として見えてくる。こうして古文書を読めるようになると、今はとうにいない昔の人のナマの息吹を感じられるようになりアルな感覚が生まれ、一気に歴史が

### 終わらなき勉強の道

学芸員には、こうした専門の勉強に限らず、体力や忍耐力、資料の取り扱いや保存についての新しい知識や技術の習得、さらに欲を言えば、専門に限らない幅広い視野に立った知識や教養も必要である。武士(学芸員)たるもの、日々武術の鍛錬や武器の手入れ(勉強)を怠ってはならない。どうせ一生使うのなら、刀は切れ味のいい方がいい。自戒の意味も込めて、この仕事は終わりのない勉強の道である。

亀尾 美香

# 志士の生きざまを見る

## 「志士たちの明治」展を終えて

今年度最初の企画展「志士たちの明治」展が終了した。いっになく展示できる資料の少なさに苦しめられたが、担当者としては思い入れの強い展示となった。



今回の展示では、大石弥太郎(圓)と大石団蔵(高見弥市)の二人を核とし、前者の資料については香南市教育委員会、後者は高知県立図書館および団蔵の子孫高見長臣氏より多大な協力を賜った。特に高見家には、ポスターにも使用した団蔵の肖像写真や辞令類の写などが残されており、英国留学からの帰国時期や、明治に入ってから数学修行歴など、未見の情報を得ることができた。団蔵が那須信吾や安岡嘉助と同様、志士として早くに生涯を終えていたなら、薩摩の人間となっていギリスに留学することも、理数系の才能を発揮して数学教師になることもなかったであろう。人生や運命の不思議さを歴史に教えられる瞬間である。

志士には、生き残るのを恥とする感覚があり、中岡慎太郎の詩には「吾が身死すべくし

て未だ死せず、淪落且つ抱く儷生の羞」という一節がある(過筑紫灘有感)。弥太郎・団蔵ともに、明治以後、自らの思いを記したものは見いだせないが、志士の生き残りとしてどのように「維新」を思ったのだろうか。展示で取り上げられなかった他の「生き延びた志士」も広く視野に入れ、今後も模索を続けてゆきたい。

亀尾 美香



戦後70年そして龍馬生誕180年

# 準備着々”夏休み子どもフォーラム“ 龍馬の地元から発信・テーマは日本の洗濯

## パネリストを高知に絞る

館は2018年1月の新館建設に向けてリニューアル構想が進んでいます。龍馬のことを伝えていくのはもちろんのこと、混乱の時代を切り拓いていく「未来の龍馬」となる子どもたちを育てていくこともまた龍馬記念館の役割だと考えます。



学芸員に刀を見せられ、学習する子供達

高知県内からの入館者が少なく、全体の5%以下です。そうした地元対策が館の取組まねばならない一番の課題です。龍馬の地元高知がこれではいけない。高知の子ども達には龍



熱く龍馬を語る子供達

馬の行動や考え方から多くの事を学び取ってもらいたいという思いから今年のフォーラムのパネリストは高知の子ども達に絞りました。以前、龍馬記念館を訪れ「拝啓龍馬殿」にメッセージを残してくれた子ども達から土佐中、付属中、学芸中、伊野中、窪川中の5名。また、第四小のように、龍馬の生誕地校区で校歌に龍馬が登場する

## 高知大生が特別参加

また特別参加として、島根県から今年高知大学に入学された川神さんにもフォーラムに加わっていただくことになりました。川神さんは自分の志を曲げずに龍馬のおひざ元高知で新生活をスタートさせたという熱い龍馬ファンです。川神さんにはお話だけでなく、パネリストの一人としてもフォーラムに参加していただくことになっています。年齢も近い「龍馬好きの先輩」の現実の話は、きっと子ども達の間にも響くでしょう。



龍馬との約束パネルの前で参加者たちと記念撮影

## 事前のアンケートから

さて、子ども達の世界の「ぜんたく」したいことは？パネリストへの事前のアンケートでは、「龍馬と正反対で、国を動かそうと考えていない、自分の利益のために議員になった人(旭東小6年)」「世界中のケンカやイジメ(第四

小3年)」「テロや殺人など人の命が消えてしまうこと全て(旭東小6年)」「桂浜にゴミが捨てられていること。観光客に見られたら恥ずかしい(浦戸小6年)」など、思わず大人が考えさせられるような回答も。フォーラムではこれらの問題を洗濯するための方法もみんな考えていきたいと思っています。また今年のフォーラムでは、これまで以上に舞台を設置せずにパネリストと観客が一体となるような雰囲気作りを考えています。一般参加は無料です。参加された皆さんにも一緒にフォーラムを盛り上げていただきたいと思っています。多くの方のご参加お待ちしております。

尾崎 由紀

今年は龍馬生誕180年！

# さらに暑い よさこいの夏が やってくる!!



動画配信中!

ぜよーも、4回目の出場が決まった。そして、今年の「桂浜・龍馬プロジェクトぜよー」は、さらなるグレードアップを果たした。なんと、高知を拠点に、全国、いや世界で活躍されている堀内佳さんが歌い手として参加してくれることになったのだ。堀内さんは高知のご出身で1歳の時に先天性網膜腫瘍により両眼を摘出、レコードの音を頼りに独学でギターを弾き始め、バンドグループを結成し活躍、高校卒業後、鍼師として整形外科院に就職、その後、14年間勤めていた外科院を退職。プロミュージシャンとしての道を歩むことになり、現在に至る。という経歴の持ち主である。

高知の方なら一度はその歌声を耳にしたことがあるのではないだろうか。力強さとやさしさを併せ持ち、澄んだ歌声はなんともない雰囲気包まれる。今回、その歌声がよさこい本祭の2日間、我がチームを盛り上げてくれる。そして、今年は龍馬生誕180年の節目の年を迎える。龍馬を発信しようと思いがち上がった我がチームのためのよさこい年！龍馬生誕を祝うべく、また、発信すべく、高知の街を艶やかに華やかに舞い踊る。

ぜひ、みなさんも踊り子として一緒に参加してみませんか？ご参加お待ちしております！  
西本 有里

飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう！ 視聴方法は簡単！

① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード  
② アプリを起動し、マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。  
※本コンテンツは2015年9月30日まで閲覧可能です。

## 北海道で“龍馬基地”が誕生 浦臼町との連携交流始まる

今年1月、「龍馬を生きた4代目・坂本直道」展を開催し、龍馬の子孫をご紹介した。坂本直道(1892~1972)は、郷土坂本家6代目を一時継いだ後に坂本龍馬家4代目となった人である。9年前には坂本直寛の孫で、農画家の「坂本直行」展も開催している。

坂本家や坂本龍馬家の人々は明治31(1898)年から翌年にかけて、坂本直寛(龍馬の甥)を中心に、高知から北海道樺戸郡浦臼町に移住した。北海道・浦臼町は、龍馬ゆかりの地である。そこで当館では、龍馬生誕180年の今年、浦臼町との連携交流に踏み出した。齊藤純雄町長からも「ぜひやりましたよ」と即答いただいた。これまでの交流をより深め、北海道での「龍馬発信」の基地として連携していくというもので、情報交換や資料の提供、共同企画など、



浦臼町郷土史料館全景

龍馬研究や顕彰にとって期待が高い。浦臼町郷土史料館には、龍馬書簡(安政五年七月頃)をはじめ坂本家ゆかりの資料が所蔵・展示されている。同書簡は、石狩川の氾濫によって被災した坂本家が、世話になった高知県・本山町出身の前田家に贈ったとされており、数年前に旧蔵者前田寿子さんから同町に寄贈された。龍馬らの展示室は充実している。また、同町は高知県・本山町とは16年前から友好交流町であり、町職員への派遣や修学旅行などが、年々つながりを深めている。札幌からも比較的近く、石狩川のほとりに位置する浦臼町は北の歴史とロマンスを感じる町。龍馬記念の年に、新しい「龍馬基地」が誕生する。

前田 由紀枝

はや、一年の半分が過ぎようとする今この頃。6月の高知...といえは、忘れてならないものが！それは高知が1年の中で最も盛り上がるよさこい祭の主役、踊り子募集の季節だということ。県内のあちこちで、踊り子募集のチラシやポスターを目にすると、ああ、高知の夏がやってきたなと感じる。桂浜・龍馬を盛り上げようと結成された我がチーム、桂浜・龍馬プロジェクト

# 拝啓 龍馬 殿

92通

平成27年3月21日～6月20日

僕は「おい龍馬」というまん画で坂本龍馬先生に興味をもち、それから2年たちつきり龍馬ファンになってしまいました。富山にいたので遠く来れないと思いましたが、今こうして桂浜や銅像を見れてとても感概しています。いつかタイムマシンができれば必ずその命を助けてもつと生きてほしいと思っ

(3月21日 富山 Y・K 13歳 男子)

わたしは坂本龍馬の大河ドラマ、人生観あがれです。大好きな龍馬、高知へ来た事、人生の最高です。男前の龍馬どうぞゆつくり眠ってくださいませ。また日本の未来を守ってください

(3月26日 福岡 M・T 67歳 女性)

私2年ぶりにまた来てしまいました。また一人です。いつか妻子を連れて来ようとは思っていますが、やはり一人がいい。忙しい日々から開放され、頭の中を真っ白にしてリセットする毎回そうなんです。龍馬さんの生き方をなぞり、これからの自分の人生をふと考える。なんとなくイメージは沸いているが、そうなるのか？それでもいいのか？活字で書いて胸がいっぱいになります。我が子や家族はやはり幸せであってほ

しいと願います。いろんな思いを伝えるのは難しい。今日は龍馬さんの思いをしつかり受け取り、いつか我が子も思いを受け取ってほしい。そんな優しい人になってほしいと願うばかりです。

(3月26日 山口 K・S 44歳 男性)

身分差別のない時代をつくるなんて勇気のある方だと思いましたが、私は海を見るとききれいな」とか「こまであるかな」と思っています。龍馬さんは何を思っていたんですか？またいつか一緒に龍馬さんの見た海をながめたいです。龍馬さんと会えるような、ならべるような人間になるために恥の無い生き方をします。

(3月31日 兵庫 K・T 12歳 女子)

前から一度訪れてみたかった、やっと実現しました。龍馬さんが何を想い散策されたでしょう。今、桜が満開です。龍馬さんも桜の花に心動かれたことでしょうか。命短い桜の花。まるで龍馬さんのようです。すこいやされました。元気をいっぱいもらいました。昨年10月末に手術して以来、生きて良かった、これからはがんばろうと思えました。龍馬さん、ありがとう。

(3月31日 兵庫 H・K 59歳 女性)

世界の平和はまだまだのようです。今、正に、龍馬さんのような男の出番が来ているように思います。世界をまとめる男の出現を見たいものです。また産まれ変わって誰かの魂の中にもぐり込んで、今度は世界を相手に暴れ回って欲しいものです。

(4月29日 宮城 T・M 66歳 男性)

私があなたに出会ったのはいつかは覚えていません。ただ、ゲームのキャラに「りょうま」と名付けていたことから、小学生の頃から興味を持っていました。龍馬さんの力強い生き方に心ひかれ、気付けば第2志望も高知大学に、「もっと高いところを目指せ」と担任に言われたものの志は曲げず、ついにこの春から高知大学に通い、龍馬さんのおひざ元で新生活を始めることになりました。辛くともありますがいつか龍馬さんのように「日本を洗濯」できるような子どもを教育できるような教師になることを目標に、毎日勉強をがんばっています。ここまで私の人生に影響を与えた人物は龍馬さん以外にはおりません。これからも龍馬さんのファンとして生きていきます。

(5月5日 高知 Y・K 18歳 女性)

新たな世界にチャレンジすることになりました。但し、自らの意志というよりは宮仕えに伴うものです。心の整理をしながら時を過ごしてきましたが、初めて高知の地を訪れ、貴殿の生き方そして努力を知り、自分の向かう道に自信を持って臨むことの大切さを認識することができました。栄光の道も、いばらの道も、過ぎしまえばただの道。新しい道をどうしていくかはやはり自分の努力にかかっている！すっきりしました。

(4月14日 埼玉 Y・Y 52歳 男性)

人生、正直、まっすぐに生きたいと今日まで思っていました。山形県米沢市より車で友人と来ましたが、高速道路では気付かないものが一般道路を走れば見えてくるものがありました。人生も同じではないでしょうか。一日一日を真剣に誠意を持って接すれば道は開けてくるような気がします。今日、坂本龍馬記念館に来られてシエイクハンドの写真を撮られたのがうれしかったです。お元気です！

(4月29日 山形 S・K 66歳 男性)

龍馬さんの目指した日本の平和は実現したようですが、

私があなたを知ったのは、小学2、3年生の頃だったと思います。子ども心に「この人すごい」と純粋に感じました。成長とともに、あなたの生き方、考え方と触れ、私もこうでありたいと思うようになりました。高校3年の時、一度あなたに手紙を書いたんです。図書感想文という形でしたが、あのと私は「龍馬さんのように日本を変える力はないけど、目に映る人を守り助けていきたい」と書きました。あと「今の日本をどう思うのか？」と。あれから約20年経ちました。日本は日々変化しています。ついていけないときもあります。でも毎日一生懸命生きてみます。そちらに行ったときはぜひ声をかけさせてください。「私はあなたがつくった日本を生きました」って。ずっと大好きです。また手紙を書きに来ます。太平洋を見ながら、この手紙が本当に届くような気がしてなりません。龍馬さんありがとう。

(4月2日 愛媛 T・Y 34歳 女性)

常に志高く、龍馬伝にはまり16・30到着。会いに来ました。目的のシエイクハンド達成！長州より。

(4月3日 山口 M・I 37歳 男性)

9才の娘と来ました。龍馬さんが乙女姉さんに書いた手紙にはユーモアもあり、龍馬さんのお人柄がよく分かりました。また絶対に訪ねます。それまでさようなら。

(4月3日 千葉 F・S 38歳 女性)

私は龍馬さんの事が好きです。なぜならとても前向きで、人を引き込む力があるからで

桂浜の遠い異国に思いをはせる心は同じものと、同感することが多くあります。私の娘も異国に暮らしています。今日は海鳴りがして海が存在を主張しているようですね。3・11以降、高知県の方々に助けられることがたくさんありました。たくさんしがらみと歴史を乗り越えてあなただけに言いたい。ありがとう。

(6月3日 福島 T・O 56歳 女性)

### \*\*\* 編集者より \*\*\*

今年は終戦から70年。「平和」とは言い切れなくなってしまった今、改めて平和について考えるときです。毎年、終戦記念日に開いている「子ども龍馬フォーラム」は、この「拝啓龍馬殿」にメッセージを残してくれた子どもたちがパネリストとして参加し、平和について考えるものです。GW中、第1回のフォーラムに兵庫県から参加してくれた中学生が記念館に遊びに来てくれて、再びメッセージを残してくれました。8月には、同じく第1回のフォーラムに参加してくれた小学生が「桂浜龍馬プロジェクトぜよ！」に踊り子として参加してくれます。龍馬フォーラムはその日に話して終わりではなく、様々な形で続いています。今年の龍馬フォーラムにもご注目ください。

尾崎 由紀

### 「バカヤロー」と叫びたい

森 健志郎

春の連休と言えば、龍馬記念館にとって一番入館者の多い時期である。その年の一日で一番の入館者はこの連休中の一日に決まる。因みにこれまでの一日の入館者の最高は6682人。ご推察通りこの数字はNHK大河ドラマ「龍馬伝」放映の年2010年5月2日だ。多分この数字が破られることはもうないだろう。というわけで、春の連休時、桂浜界隈の道路混雑は常に悩みの種となる。これまでも臨時駐車場の設置、シャトルバスの運用など手は打ってきた。しかし、現在も暗中模索状態である。

そんな中で、今年高知市が考えた方式は、駐車場は一カ所。桂浜の西方、高知競馬場の駐車場が臨時駐車場を設け、桂浜へ行くマイカーはこの駐車場に誘導され、シャトルバスに乗り換える。シャトルバスは浦戸の裏道経由で桂浜に入る。バスはその後帰り客を積んで、今度は桂浜の表通り、花海道経由で臨時駐車場に帰る段取り。一回り、およそ30分の方式が、ここ数年定着しつつある対応策。ただ、この方法にも問題があるのだ。

なんとこのシャトルバスが、龍馬記念館下の県道を通る際、「龍馬記念館前停留所」に停車しないことだ。「混乱するから」と言うのが市の停車させぬ理由である。その結果、桂浜に来て龍馬記念館を目指す場合は、桂浜駐車場から龍馬記念館までの区間を歩いて上り下りしなければならぬ。お年寄りや、小さい子供さん連れにとっておよそ800メートルの急坂は手こわい。諦める人もいるし、雨でも降ればなおかつやである。普通に止まっている市内バスを横目にシャトルは通過していく。納得できる話ではない。「なんで止めてくれないの？」。

### 一課制スタート 前田学芸員が学芸課長

館のリニューアル計画に伴い、体制強化を実施するためこれまで一課で運営していた総務、学芸部門を分離し春の人事異動で二課制とし、新たに課長ポストを設けた。総務課長は副館長が兼務、前田由紀学芸員が学芸課長に就任した。また、定期異動で契約職員一人の入れ替わりがあった。昨年の「夏休み子ども・龍馬フォーラム」などで力を発揮、今年さらに期待されていた田中智子さんが学芸館に転勤、同館からは新たに「新戦力」として宮崎圭子さんが就任、4月から新体制のスタートとなった。

### 博物館体制の強化に向けて

記念館での勤務も12年。念願の新館建設と既存館リニューアルへの動きに感慨ひとしおです。そんな中、3年後のオープンに向けて学芸課が新設されました。いよいよ博物館体制スタートです。学芸課は総務・管理の総務課と分かれ、新館の研究分野と既存館のバフォーマンス分野の総括という要となり。その学芸課長として今まで以上に龍馬顕彰と発信に努めていく所存です。前田 由紀

4月1日から坂本龍馬記念館で勤務しております。高知生まれの高知育ちですが、龍馬の人物像や幕末の志士についてはまだまだ知らないことが多く勉強中です。県外だけでなく県内の方にも龍馬の魅力発信し、たくさんの方に満足いただけるよう努力いたします。よろしくお願いたします。

宮崎 圭子



昨年4月から今年3月まで龍馬記念館に勤務して、短い期間ではありましたが、龍馬に深く接することが出来ました。お客様からの質問もとても勉強になりました。龍馬記念館で学ぶ事が出来た貴重な体験をこれからも生かしていきたいと思っております。ありがとうございました。

田中 智子

## ■現代に生きていたら…志士たちの職業をイメージ 「幕末の志士人気ベスト10」展

今年で12回目を迎える「幕末の志士人気ベスト10」展は、記念館のアンケートにあるお気に入りの人物の集計結果をパネル写真で展示する海の見える・ぎやらしい好評の展覧会である。

今回は通常の展示から、“現代に志士達が生きていたら何をしている！？”というテーマで、志士達の職業をイメージして描いて頂いた楠本剛氏のイラストで表現する。

1位の龍馬は“宇宙飛行士”として日本の世界の、いや宇宙の海援隊を今や実践しており、天空からガッツポーズで私達を見ている。2位の勝海舟は“大学教授”として持論の考察を冷静に時に熱く講義している。3位の西郷隆盛は“占い師”として相手の心を静かに洞察している。4位のジョン万次郎は“DJ”としてワールドワイドな感覚で楽曲を選曲している。5位の高杉晋作は“ギタリスト”としてカリスマ的にスポットライトを浴び弾け飛んでいる。6位の土方歳三は“俳優”として舞台上に立ち、眼光鋭く刑事役で圧巻の演技中だ。7位の中岡慎太郎は“レーサー”として土佐レーシングチーム・KITAGAWA YUZUを背負い孤高のレーサーとしてグランプリレースに挑んでいる。同7位のお龍は“看護師”として現代でも人々を癒している。9位の沖田総司は“アイドル”としてマイク片手に熱唱中。そして10位の桂小五郎は“弁護士”として裁判中の法廷で反対尋問の真最中だ。

“現代に生きる志士達”をみなさんも是非想像しにいらして下さい。楽しさが広がると思います。

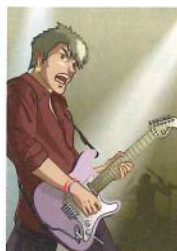
中村 昌代



坂本龍馬



ジョン万次郎



高杉晋作



土方歳三



中岡慎太郎

## ■変貌を目指す“海の見える・ぎやらしい”

“海の見える・ぎやらしい”が、記念館の中2階にオープンし、2階空白のスペースに現在のよう形で展示するぎやらしいとなって今年の11月で10年目を迎える。

記念館の入館者は県外のお客様が圧倒的に多く、高知の方達にもっと足を運んで頂きたいという思いから、一般の作家の方々から「龍馬」または「龍馬の世界」を自由にイメージ・表現できる空間として提供してきた。

洋画・イラスト・写真・書・ボトルシップ等、高知の作家から県外の作家が龍馬をイメージした個性豊かな作品が集まり100以上の展覧会を開催しているが、記念館のリニューアルに向かい、改めて“海の見える・ぎやらしい”の存在を考えて行きたいと思う。

まずは、県内・県外の若手からベテラン作家の作品紹介により、当初の目的である地元高知の方達に来館して頂き、“海の見える・ぎやらしい”をもっと知って頂く。次に、記念館と学生のコラボレーションで作品を創り、展覧会を開催する。また、体験型の展覧会も思案中だ。そして、ここで展示してみたいという方には一般公募という形も考えている。

更には、太平洋をステージにパフォーマンス〈演奏・芝居・朗読・インプロヴァイゼーション（即興）等〉のイベントを開催する。展覧会と関わる内容や龍馬を題材にしたもの等、内容へのアプローチは色々ある。「坂本龍馬記念館の“海の見える・ぎやらしい”へ行ったら、龍馬もアートもすっごく楽しめたよ！」と言って頂けるような「龍馬とThe Arts〈芸術〉」な空間を目指したい。新館にはホールも新設されるので、何れはホールとも連携させ、より充実した坂本龍馬の世界を皆様に提供出来たらと思う。

中村 昌代・小島 千穂



展示風景

## 入館状況

2015年6月20日現在（開館以来8,574日）

- ◆総入館者数 3,688,540人
- ◆最多入館 (2010年5月2日) 6,686人
- ◆最少入館 (2004年10月20日、台風のため) 8人
- ◆2015年度最多入館(2015年5月4日) 2,429人
- ◆2015年度最少入館(2015年6月17日) 114人

## 編集後記

手間取るだろうなと思っていた原稿がなんと、トップ出稿となった。現代龍馬学会の研究発表会の見聞き特集である。毎年悪戦苦闘するのだが今回は自分が研究発表者の一人でもあった亀尾学芸員があっさり仕上げた。また、今年が戦後70年、龍馬生誕180年という節目の年に当たるだけに、原稿にはそれぞれいつも以上の思いが加わったような気がしている。巻頭の4文字熟語「侃侃諤諤」もその気持ちだ。(モ)

館だより“飛騰”第94号(年4回発行)表紙題字：書家 沢田 明子氏

発行日 2015(平成27)年7月1日  
 発行 公益財団法人高知県文化財団  
 高知県立坂本龍馬記念館  
 〒781-0262 高知市浦戸城山830  
 TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015  
<http://www.ryoma-kinenkan.jp>  
 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休  
 入館料 一般500円・高校生以下無料  
 身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・  
 戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者1名  
 高知県・高知市長寿手帳所持者は無料

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。ご希望の方は、92円切手5枚をお送りください

## テーマは“龍馬原点再考” 現代龍馬学会研究発表会”開催 100人を超える参加者・龍馬に燃える 小松さんの記念講演に拍手の渦

混迷を深める世相一新の思いを込めて、第7回「現代龍馬学会総会・研究発表会」が5月23日国民宿舎「桂浜荘」で「龍馬・原点再考」をテーマに開かれた。今年には「龍馬生誕180年」「戦後70年」という節目の年でもあり、会には県外からの参加も多く、100人余りが龍馬を熱く語り合った。さらに、ノンフィクション作家小松成美さんの記念講演、昼休みには「長宗我部火縄銃鉄砲隊」の迫力の演武などもあつて盛り上げた。

### 龍馬甚句でスタート

会は午前9時の総会に続いて来

賓の高知市教育長松原和廣氏挨拶のあと、竹内土佐郎氏の「龍馬甚句」で会場は一気に「幕末ムード」に。余韻を引いたまま研究発表会はスタートした。トップバッターは長年教育現場に携わり子供達への龍馬継承に努める宮英司さん。教科書への坂本龍馬についての記述や資料、データを照らし合わせながら、現代にいかに関龍馬精神が必要かをいねいに解説した。

龍馬やジョン万次郎



熱い小松さんの講演に聞き入る会場

らと交流し幕末当時の記録を残した池道之助のご子孫、鈴木典子さんは、著書「池道之助日記」に参加者と共に読み進めながら幕末当時の様子をひも解いた。「龍馬の生まれたまち記念館」の学芸員森本琢磨さんは、龍馬生誕地・上町の龍馬継承の歴史を文献史料等を用いての紹介となった。

### 龍馬像の夢語る「県外組」

龍馬ゆかりの長崎に「龍馬の銅像建つうで会」を結成し風頭公園に銅像建立を実現させた发起人、柴崎賀広さんは、龍馬紋服を思わせる着物姿で登壇し、「風頭・龍馬像」に込められた

メッセージを熱弁。

北海道在住の椿原庸夫さんは、今年米寿の桂浜龍馬像が、高知の若者たちが中心となり建立されたプロセス、そこに学ばべき大事なものの、現代へと引き継がれていく夢を語った。

そして最後は当館亀尾美香学芸員が、吉田東洋を暗殺した1人で幕末から明治を、生き延びた志士、土佐郷土・大石団蔵を取り上げ、時代の変遷とその生涯との関わりにアプローチした。6名の会員の皆さんそれぞれが練り上げた独自の考察に、各発表者への質問が相次ぎ、熱心な質疑応答となった。

### スタンディング オーベーションも

基調講演では、長年トップアスリート達に真摯に向き合いインタビューを続けてこられた小松成美さんが「坂本龍馬が築いた日本人のプライド」と題して、現代を生きるトップアスリート達が持つ確固とした信念と、そこに確かに見だされる龍馬精神を語った。快活ではつらつとした語り口に、参加者はぐっと引き込まれ聴き入った。

昼休憩時間、八策の広場では、「長宗我部火縄銃鉄砲隊」が時代装束に身を包み登場。火縄銃が構えられ、緊張感に息を飲む



迫力満点の“長宗我部火縄銃鉄砲隊”の実演＝八策の広場で

と、ドンーと刃りを震わせとどろきわたる発砲音。気迫のこもった演武は大いに観衆を沸かせた。

### 再会を約して

午後5時、危機迫る時代、改めて龍馬の原点に立ち返り国のありようを考えよう」とする「宣言文」を読み上げて閉会した。毎年のように東京から来高される方など、県内外から109名が参加し、さらなる学びを深め、あらためて龍馬生誕180年、戦後70年に思いを馳せ、多くを得る有意義な一日となった。

恒例の夜の懇親会には講師の小松成美さんにもご参加いただき、また、「おんちゃん合唱団」のにぎやかな歌声で幕を開けると、会員、参加者共に打ち解けた雰囲気でお酒を深め合い再会を約した。(手島ゆか)

# 「坂本龍馬が築いた日本人のプライド」



ノンフィクション作家・  
兵庫県立大学客員教授  
**小松 成美 氏**

小さい頃から「竜馬がゆく」を愛読し、龍馬も高知も大好きな自分から、4つのテーマにプラスワンしてお話したい。  
1つめは、龍馬の「不可能を可能にする強靱な意志と想像力」。龍馬はさまざまな困難を乗り越え、薩長同盟を成立させた。テニ

スプレーヤーの錦織圭を取材したとき、当時19才の錦織は、幕末にアメリカに渡った維新のサムライたちと心を同じくしていると語った。  
2つめは、龍馬の「挫折を受け入れながらも、新たな挑戦から決して逃げない」心。龍馬はいつも命がけで、また友人を数多く亡くした。スキージャンプ選手の葛西紀明は、長野オリンピックで大きな挫折を経験している選手はいない、でも挫折は素晴らしい」と語っていた。

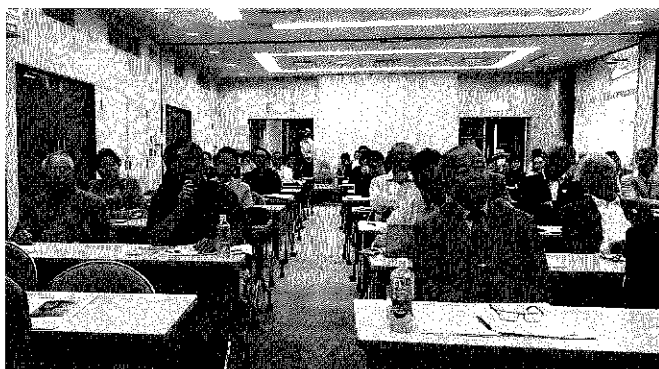
3つめは、龍馬の「伝統と革新のはざまで、双方を理解し、思いを寄せる絶妙なバランス感覚」。龍馬は武士として古い学問や武道を学びながら、進んで新しいものを受け入れてきた。18代目中村勘三郎は、歌舞伎界屈指の名門に生まれ、最も切符の売れる役者だったが、伝統的な歌舞伎の世界に新しい風を吹き込むことに熱心だった。  
4つめは、龍馬の「自分ではない他者のために力を尽くす」心。龍馬だけでなく土佐の人も、私利私欲でなく他人のために働

く。3月11日の震災直後、ドイツワールドカップを戦ったなしこジャパンは、被災地のために戦うと決意し優勝した。  
そしてプラスワンは、龍馬の「争いのない国を目指した平和の心」。自分の大敵父のひとりとは中国で戦死したが、遺骨を家に届けてくれたのは高知の人だった。戦後70年が経ち、若い人はすでに先の大戦を書物や映像でしか知らない。大政奉還のため尽力した龍馬にならい、和平の心を持つことの大切さを訴えていきたい。

## 第7回龍馬学会総会・研究発表会

# 「龍馬生誕180年・原点再考」

第7回現代龍馬学会は、去る5月23日、国民宿舎桂浜荘において、総会・研究発表会がおこなわれた。基調講演には、高知県観光特使でもあるノンフィクション作家・小松成美氏を迎え、龍馬にならい現代に生きる我々がどのように生きるべきかのヒントを講演いただいた。他に会員6名の研究発表、および昨年に引き続き、今年も昼休憩のあいだに長宗我部火縄銃鉄砲隊による演武が八策広場にて披露された。



参加者からは熱心な質問が相次いだ

### 宣言

高知県立坂本龍馬記念館現代龍馬学会は、平成二十一年の発足から七年目に入り、県内外から一〇九人が参加して第七回研究発表会を開いた。テーマは「龍馬生誕一八〇年・原点再考」。憲法や自衛隊をめぐる政府が強権を振るい、時代が危機に陥ろうとしている今、命がけで平和と自由を追い求めた龍馬の生涯と思想に学ぼうとしたものだ。  
ノンフィクション作家小松成美さんの講演を挟んで、地元高知と長崎、北海道の研究者六人の発表が行われ、私たちは多くのことを教わった。  
再来年は龍馬暗殺一五〇年であり、龍馬記念館の新館構想も進んでいる。あらためて龍馬の「原点」に立ち返り、この国のあり方を考えていきたい。

平成二十七年五月二十三日  
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会



#### ① 宮 英司氏

高知大学非常勤講師・宮幼稚園長  
「坂本龍馬は教科書においてどのようにとりあげられてきたか、子どもたちにもっと龍馬を」と



平成元年の  
小学校学習指  
導要領で人物  
中心の歴史  
教育が打ち出されたさい、42人掲げられた歴史上の人物のなかに坂本龍馬の名はなかった。高知ではこのことについて疑問に思う社会科教員が少なくない。実際の教科書の記述を取り上げつつ、龍馬の歴史上におけるはたらきが先述の42人に劣らないこと、学校教育で取り上げる意義を考察した。併せて沢辺琢磨など、龍馬と同時代に生きた人々にも同様に着目した。

#### ② 鈴木典子氏

池道之助5代目  
「幕末長崎での出来事から「池道之助日記」に観る」



池道之助  
(1821-1872)  
は、ジョン万次郎と同じ中浜生まれで、慶応2年、土佐藩の役目で長崎へ向かう万次郎に同行し、「思出草」を記した。現代に残る貴重な史料を翻刻し、2011年に「池道之助日記」として刊行したなかから、いろは丸事件の賠償金受け取り、土佐藩が購入した蒸気船代金の受け取りなど、土佐の人間として長崎で関わったできごとを紹介した。

#### ③ 森本 琢磨氏

高知市立龍馬の生誕地まち記念館学芸員  
「高知市上町における龍馬頭彰の歴史」



龍馬のふるさと上町における龍馬頭彰の歴史を検証する。誕生地碑は、木柱、花崗岩の碑に次いで、戦後に現在の碑が再建された。11月15日の「誕生祭」は、1979年に「龍馬まつり」として初めて開催され、以降「誕生祭」として規模を拡大した。地元では元高知市職員・吉松靖峯氏を中心となり、顕彰活動が継続されており、2004年の「龍馬の生誕地まち記念館」のオープンに至っている。

#### ④ 柴崎 賀広氏

現代龍馬学会委員・世界龍馬学校主席  
「風頭山・龍馬像からのメッセージ」



昭和62年、  
長崎に龍馬像  
を建てたいと  
いう運動をスタートさせた20代の若者たちは、「龍馬の銅像建つて会」を結成、募金活動を始めた。小遣いを募金してくれる子どもたちや、高校教師を退職しながら銅像制作を引き受けた山崎和國氏など、多くの人の協力があつた。完成は延期されたものの、平成元年5月11日、風頭公園に龍馬像が完成した。活動終了後は長崎龍馬会が生まれ、銅像の維持活用をおこなっている。

#### ⑤ 椿原 庸夫氏

現代龍馬学会委員  
「日本一の龍馬像を建てた若者たち」に学ぶ」



今年米寿を迎える桂浜の龍馬像について、その建設プロセスを振り返る。銅像建設趣意書を書いた大野武夫、募金活動をおこなう青年らにフリーパスを与えるなどした土佐の交通王・野村茂久馬、幕末で陸援隊に参加していた伯爵・田中光頭、銅像を制作した本山白雲、龍馬の映画制作に応じた俳優・阪東妻三郎など、各界からさまざまな協力を得て龍馬像は完成した。

#### ⑥ 亀尾 美香氏

坂本龍馬記念館主任学芸員  
「大石団蔵の幕末・明治」



開催中の企画展「志士たちの明治」展で扱った大石団蔵(高見弥市)について、脱藩後の京都での動向や、薩摩藩士となって英国留学を果たしたことについて、これまで注目されなかった史料が鹿児島県史料のなかにかくか見つかった。また、高見家にも系譜や辞令写などの史料があることがわかった。新たな史料の発見により、従来の説のいくつかを訂正する余地が生まれている。

### 来賓挨拶



高知市教育長  
**松原 和廣 氏**

なかで、高知の子どもたちにはぜひ龍馬に学んでほしいと考える。今年生誕180年行事として、鹿児島・山口・高知の中学生でフォーラムを開催する予定もある。龍馬学会には、そうした活動の礎としての役割を期待している。

「維新は遠くなりけり」

宮川 禎一

もうすぐやってくる明治改元から150年目。これに合わせて各地でイベントや展覧会などが企画されていることである。しかしこの150年目という数字は節目と言えるのだろうか。

武家政治が終焉し、近代日本が始まって150年。もちろん記念すべきことである。しかし幕末維新史に関わっている筆者でさえもなにか釈然としな

い心持である。筆者は昭和34年生まれだが、明治生まれの祖父は筆者の幼稚園時代に亡くなったため祖父の昔話を聞いた記憶はない。祖母は筆者が高校生の時に亡くなったが、祖母

の語った昔話の記憶とは昭和22年の普通選挙に婦人参政権が与えられたのでGHQが選

挙監視にやってくるから髪にパーマをかけて投票に行つたのだという話である。昭和はじめ生まれの父は平成に入つて亡くなったが、旧制宇佐中学時代の昭和15年に満州国皇帝溥儀が宇佐八幡宮に参拝する様子を生徒全員で参列して見たのだという。

何が言いたいのかといえ、筆者個人の歴史記憶は家族が昭和前半頃の昔話をしていたことである。今が大正時代であれば古老から戊辰戦争の記憶を聴けたかもしれない。すなわち個人のもつ耳で聞いた歴史とはせいぜい祖父父母や父母

の昔話の記憶の断片、太平洋戦争中にひもじかった話などのうっすらとした伝達が精いっぱいということだ。70年前が

関の山であろう。今から150年前といえども生存者は誰も居ず、語り部はなく、史料や小説から知る幕末維新史だ。これが今から200年前ではどうだろう。伊能忠敬が日本地図を作るために歩き回った文化年間だ。それは益々速く、実感は何もない。歴史はこうして遠ざかるようだ。



約150年前の伏見船宿の食事の様子 (文久元年刊『淀川兩岸一覽』より)

150年前といえども生存者は誰も居ず、語り部はなく、史料や小説から知る幕末維新史だ。これが今から200年前ではどうだろう。伊能忠敬が日本地図を作るために歩き回った文化年間だ。それは益々速く、実感は何もない。歴史はこうして遠ざかるようだ。

コラム・龍馬のこと

「坂本龍馬と洋学」

現代龍馬学会会員 織田 毅

龍馬が洋学(西洋の学問・技術)を学んだことは案外知られていない。海援隊でも隊士の修行課目として「政法・火技・航海・気機・語学」がうたわれているが、これは「政治法律(国際法等)・西洋砲術・航海術・機関学・語学」といった洋学のことだろう。

龍馬は土佐の砲術家徳弘孝蔵・西内清蔵に西洋砲術を、勝海舟に航海術等を学んでいる。長崎で学んだと思われる西洋の政治・法律知識も、「新政府綱領八策」の起草や『万国公法』出版計画にも活かされている。

また、洋学の基礎となる語学の知識もあった。「坂本龍馬手帳摘要」(講談社学術文庫『龍馬の手紙』所収)には、慶応元年下関に停泊の英船の記述があり、その船は「スコールステエンニツ、ラット、ラートルカストの色黄白ニ見ユル」ものだった。「スコールステエン」schuursteenはオランダ語で「煙突」の意味、「ニツ」は数字の二で二本の煙突と解釈し拙著でもそう書いたのだが、後日『維新土佐勤王史』読んで「ニツ」でなく「エツ」et(「また」の意)である事がわかった。この船は、煙突とラット(外輪)を持ち、ラートルカスト(later kast?, 後部の部屋)が黄白色の船だったらしい。

と言っても龍馬は単純な洋学崇拝者ではなかった。その手紙(慶応三年三吉慎蔵あて)には「西洋の学問を形式的に学ぶのではなくその真髓を極めて是非を検証すべき」とあり、龍馬が独自の洋学観を持っていたことがわかる。

“話してみるかよ”

「94歳の気迫」

現代龍馬学会理事 記念館学芸課長 前田 由紀枝



「あなたね、インタビューするということはどういうことか分かっているの。人のことを書くということは人を傷つけることだってあるのよ」。

3月末に坂本寿美子さんを訪ねたときの開口一番である。穏やかにあいさつをした直後のことで、私は面食らった。寿美子さんを見ると、その眼は遠くを見ているようなまなざしであった。次に、私に焦点を合わせてこう続けた。

「でもね、書いていいわよ。あなたは本当は男がやる仕事をしているんだからね。どんどんお書きなさい」。ああ、この人はフランス企業や日本の老舗デパートで管理職として働いてきた人だった。昭和という時代が戦後立ち上がった時のこと。男性社会の中で厳しい仕事をしてきた人なんだ。そう思うと、その深い瞳の色に吸い込まれそうになった。

本当のことを言えば、坂本寿美子さんに対して、坂本龍馬家5代目という冠をつけるのは似つかわしくないと思う。この人は坂本寿美子という人生を生きてきた人だから。

「こんな家に生まれた運命ね」という言葉には、坂本龍馬よりも父の直道氏とともに生きてきた思いがある。大正10年に生まれ、激動の昭和を満州からフランス・パリで体験してきた人だ。満鉄のエリート幹部の家に生まれ育った“運命”。その厳しさと優しさこそが龍馬の血筋だ。

「あなたはね、友だちでしょ。私を大事にしてくださいよ」と笑った寿美子さんが、私を勇気づけてくれる。